

2. 泌尿器科領域における漢方薬 —これまでの軌跡とこれからの展望—

県立広島病院 泌尿器科
梶原 充

泌尿器科領域において、漢方薬の適応となる症状や病態は多く、使用される漢方薬も多岐に渡る。頻尿や尿意切迫感、切迫性尿失禁、腹圧性尿失禁、尿路不定愁訴、男性不妊症、尿管結石などが適応となり、牛車腎気丸、八味地黄丸、猪苓湯、補中益気湯などが使用されている。しかし、ガイドラインやエビデンスに基づく治療が重視される現在において、ガイドラインに記載されることが少ない漢方薬が第一選択薬となることは少ない。

ガイドラインに治療薬として記載されるためにはエビデンスレベルの高い論文作成が必須である。泌尿器科領域の症状や病態に対しても、経験知である漢方医学的診断「証」のみにとらわれない科学的・統計学的な西洋医学的アプローチによるエビデンスの創出が必須であるが、現時点では泌尿器科領域でそのような動きはない。

本ワークショップでは、泌尿器科医が日常診療で経験することの多い症状や病態に対する漢方薬の実状とそのエビデンス、さらにはガイドラインでの評価について報告し、エビデンスを創出するためにわれわれ研究会員が何をしなければならぬか、何ができるかを皆様と共に考えていきたい。今後、漢方薬がより多くの医師に受け入れられ、より使用されるようになることを切望する。